

「子ども理解」についてのアプローチ ー 公開講座での心理劇の実施とその効果について ー

鈴木美子^{*1}・瑞穂 優^{*2}・吉川晴美^{*3}

*1 東京福祉大学 短期大学部 (伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

*2 東京福祉大 保育児童学部 (伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

*3 東京福祉大学 大学院 (池袋キャンパス)

〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-47-8

(2019年11月30日受付、2020年3月19日受理)

抄録：本研究では、特に心理劇の方法による進め方、内容との関係で、公開講座受講者にどのような学び、効果があったのかを考察する。心理劇(ロールプレイ)は、人間関係力をアップするためのトレーニング方法として、様々な研修の場においても用いられている。「子ども理解の技を学ぶ」といったテーマの本講座への参加は、受講者にとって一定の効果、学びの体験が成立したのではないかとこの仮説のもとに講座の内容や質問紙・アンケートの分析、考察を行った。結果、心理劇により、観客や演者の役割体験、また楽しさや驚き等の情緒体験等を共有することにより、受講者同士の人間関係が発展し、またそのことが学びの効果を高めることに関与している、等のことが明らかになった。

(別刷請求先：鈴木美子)

キーワード：子ども理解、心理劇の効果、関係的・多面的・肯定的な見方(かかわり方)、役割体験

1. 緒言

1) 先行研究

東京福祉大学で実施された公開講座「子ども理解」についての技(方法)を学ぼうー育ちあいをめざしてー(講師：吉川晴美、司会等の援助協力者：瑞穂優、鈴木美子)について、特に心理劇(ロールプレイ)という手法を用いた。本講座で用いる心理劇はサイコドラマとしてヤコブ・モレノ(Moreno, L.)により、集団精神療法として創始され、今日、日本ではひろく心理臨床や教育の方法として、様々な領域や場で活用されている(吉川, 2017)。精神科医であるモレノは、家族などの人間関係の問題を即興的な劇的方法で役割を演じることで、演者はもとより、観客にも大きな治療的効果があると考えた。この発想のひとつは、子どもが自発的に演じるごっこ遊びに起原がある。日本にサイコドラマを心理劇として広めた一人である松村(1961)は、「心理劇は、今、ここで新しくふるまうことが、重視される。自発的、創造的にふるまうことのできる人間形成がめざされる。心理劇では、そこに成立している対人関係が発展し、そのことにおいて関係の担い手として個人が伸び、その個人が伸びることにより対人関係を発展させるという体験、その

体験を豊富にすることができ方向へ周囲の状況を変革していく、その意欲が関係体験を通して育ち、それを実現する態度が、今、ここで、新しくとれるようにする」といった、心理劇により自発的創造的な人間形成がめざされること、それには今ここで新しくふるまう、役割をとる体験、対人関係の発展の体験が重要であると述べている。針塚(2003)は、人を相手とする専門家のための研修で用いられる、ロールプレイングの専門家としての資質や対応の技術向上目的に触れる中で、その資質や対応の技術についての意味を次のように述べている。自分の立場の演じ方の違いによる相手の対応の変化への気づき、そして反対に相手の役割を演じることによって、相手のその場での気持ちのあり方についての理解など、役割演技を通してお互いの気持ちの理解に基づく対応の技術である。

様々な場における心理劇実施、活用、その意味、効果については、次のような先行研究がある。まず、心理劇を行うには、話題に対するグループメンバーの認識やメンバー間の肯定的な関係性が求められる。「監督とグループメンバーに対する肯定的な認知がグループに対する安心感を生み、役割体験を支え、他者との十分な交流を促すウォーミングアップによりグループへの安心感を高めることが

大切である(如木・島谷, 2005)」。また、ロールプレイングの効果のひとつである「他者の役割を演じてみることで、自分に対して他人のとり態度や行為の意味が理解できる」ことも明らかにしている。針塚・岡嶋(1997)は演者体験によって、一層自分自身への気付きを深めたことや、劇場面での体験が日常生活にまでacting-out(行動化)したことも明らかにしている。さらに、背景が様々な今回の公開講座のグループメンバーでは難しいことではあるが、川幡(2002)の「相手をよく見る訓練、そしてその相手の相手としての自分を見る訓練によって自己分析が深まり、補助自我を演じることが可能となる」ことも踏まえておきたい。

2) 目的

本研究では、特に心理劇の方法による進め方、内容との関係で受講者にどのような学び、影響、効果があったのか、また、本講座の実施により、一定の効果、学びの体験が成立したのではないかと仮説のもとに、具体的データ(ビデオ記録、質問紙、アンケート)から、実証、分析・考察する。本講座の主要なねらい(課題)は「子ども理解」についての技(方法)を共に学ぶということであり、その学びの場は、新しく出会い、集う、様々な人々で構成される集団であるという特色があることから、本講座にこの心理劇(ロールプレイ)を活用することが適切ではないかと考えた。心理劇は、集団を対象に行われ、監督、補助自我、演者、観客、舞台の役割で構成される。人間関係力をアップするためのトレーニング方法としても広く活用されている。

2. 研究の対象と方法

1) 対象

本学実施の公開講座「子ども理解」の技を学ぼう一育ちあいをめざして一を研究の対象とする。

実施期日: 2019年11月

実施時間: 13時30分~15時30分

実施場所: 大講義室

受講者: 23名

2) 実施場所の構造と講師、協力援助者の役割

大講義室に何も無い空間を作り、受講者の座席を円状に並べる。円状の中央が舞台の役割となる。

講師、援助協力者は監督、補助自我の役割を取り、講座の進行、心理劇、講義を行う。

3) 方法

- (1) 公開講座の活動の内容をビデオ記録し、集団が大きく変化し、受講者の自発性や子ども理解が進んだと捉えられる場面を、3例抽出し、考察する。
- (2) 心理劇に関する項目と講義に関する項目の質問紙の実施をし、講座の終了時に配布、記入いただき、その場で回収。結果を分析、考察する。なお、大学で実施した公開講座用のアンケートも一部利用する。
 - ① データを量的に集計、統計的処理を実施し、その結果の分析、考察する。
 - ② 大学で実施したアンケートに記入された感想からの質的分析・考察する。

*なお、本講座受講者には、アンケート実施並びにビデオ撮影の際には、研究の基礎資料、及び今後の講座への参考資料として使用させていただくこと、並びに個人を特定できないような配慮、個人情報保護に十分配慮する旨を伝え、了承を得た。

3. 結果と考察

1) 講座の概要

(1) 出会い(ウォーミングアップ)

実習1: ローリングテクニクーはじめての集団における親和性を高める。子どもの三者(自己、人、物)関係の理解とかかわり方を学ぶ。

- ①物を渡す ②速く渡す ③「みかんです」と渡す
- ④自分の好きな物にみだてて渡す、 ⑤相手のことを考えて渡す ⑥役割や場面を考えて物を見立てて渡す。

(2) 子どもの存在のしかたの理解とかかわり方のポイント

- (1) 一人の人格をもった人間としての子ども一どの子どもも一人の人格をもった存在として尊重される。子どもの発達、成長は人格全体にかかわり、子ども期は人格形成の基礎を培う重要な時期である。
- (2) 関係的存在としての子ども一子どもは周りの環境や人と著しく関係しあっている存在である。大人は、子どもとの関係を多面的に理解し、子ども自身の活動が発展するよう、大人自身のかかわり方を変化、調整していくことが必要である。

実習2: 観技一多面的な見方、かかわり方を体験する。

- ① 講師(監督)が「これから真中で演じる人をよく見て、後でどんなことをしたか言って下さい」と提示する。

- ② 補助自我役の援助協力者が一人で演者になり、ノンバーバルで何かを演じる。
- ③ 観客（講座受講者）は各々「自分がどう見たか」をそれぞれ紙に書き留めて、発表し合う。
- ④ 演者がどのように演じたかを観客に伝える。

(3) 肯定的な配慮を必要とする子ども

実習3: エゴビルディング ねらい—肯定的な観方、かわり方を体験する

カウンセリングマインドで—心理劇の技法であるダブル、ミラーの技法も体験する。

（カウンセリングマインド：傾聴、受容、無条件の肯定的関心。相手を受け止め、尊重する。）

→安心感、信頼感、大切にされている、尊重されている
→自主、自己肯定感が高まる。

- (4) 発達する存在としての子ども—未来への発展可能性—発達する姿を全体的、相互連関的に捉える
子どもとしての豊かな生活体験ができるように環境や人間関係に配慮する。

- (5) 様々な環境・状況における子どもの存在とは—家族状況における関係的な見方、かわり方を体験する

実習4: 家族の心理劇—関係的な見方、かわり方を体験する。小グループで、家族の役割を取ってふるまうことにより、家族（環境、関係状況）における子どもや子どもにかかわる人の立場、かわり方に気づく。

- ① どのような家族か、またその家族の役割を相談し、役割を決める。
（例：父—母—子ども、祖父—祖母—子ども、母—兄—弟、祖母—母—子ども、など）

- ② 場面設定：日曜の朝—子どもが欲しい物を訴える。
家族でどうするかを相談、お店に買い物に来て帰る。

- ③ 実際に劇をやってみてどうだったかをグループでシェアする。

- ④ 各々のグループの発表

2) 抽出場面についての結果と考察

(1) 結果

抽出場面① 実習2【観技】

- i 経過：援助協力者が何かになって演じる（言葉や声は出さない）様子を見て、どのように見えたかを発表する。

ii 発表内容

- a. 誕生会でケーキに蝋燭を立て、それを吹き消し、クラッカーを鳴らした。窓を開けて星を見ていた

（花火を見ていた）。プレゼントが隠されていて、みんなで探した。

- b. クリスマスパーティーで、ツリーに電飾やオーナメントを飾り、窓の外を眺めた（雪が降ってきたよ）。少しずつ違ってはいるが、aとbに似たものが殆どであった。その中で、次のような発表もあった。
- c. 十五夜の夜スキを供えた。
- d. パーティーでケーキを食べてお祝いをした。クラッカーを鳴らすと、エアコンに引っかかって、みんなで笑っている。
- e. 花に水をあげて花が咲いた。虹が見えた。
- f. お父さんが亡くなり、お通夜で線香を立てた。電気を消して窓を開け「お父さんはお星さまになったんだよ。」

抽出場面② 実習3【エゴビルディング】

- i 経過：4人一組となり、ABCDの役割を交替して行う。
A になりたい子どもを演じる B 子どもの真似をする（ミラー） C 子どもの行動を見ながら子どもの気持ちを察して言葉をかける（ダブル） D 褒める

ii 各グループの感想

- a. 相手の気持ちが分かった。
- b. 肯定しやすい。状況を説明するのは難しい。演者はやってみるとテレが入って難しい。
- c. 肯定されるとすごく楽しい気持ちになる。遊びが盛り上がっているような気分になった。
- d. その人の気持ちになってつぶやくことが難しかった。
- e. 真似をしながら何をしているかな、何を考えているのかなと想像しながら行った。CやDは、少し引いて俯瞰的に見ないと難しい。
- f. Cは難しかった。

抽出場面③ 実習4【家族の心理劇】

- i 経過：4人家族になり、どのような家族か考えて役割を決める。日曜日の朝、子どもが買ってほしいものを訴える。どうするか家族で相談をする。お店に行き、買い物をして帰る。

ii 各グループの感想

- a. 子どもスマホを買いに行った、女子高生でエステに行きたいと言ったがダメだった。
- b. クリスマスプレゼントにレゴブロックが欲しい。祖母が買ってくれることになったが、サンタクロースではないため、子どもが居ないところで相談し、内緒で買いに行った。買いに行くとお店の人に、ちょっと考えなさいと止められた。
- c. 年長兄が友だちの家で、ニンテンドースイッチで遊んだら楽しかったので買って欲しい。相談する間も

なく、祖母が買ってくれることになった。店に行くと、思っていたよりも高価なため、買えないかもしれないことを察知して子どもがダダをこねる。子ども役をしてみても、やってみたら、もうちょっと粘ったらイケるかな、こういう言い方をしたらつけ込めるといった、ダダをこねている気持ちが分かったように思えた。

- d. 父・母・小2男児・幼稚園女児、兄が話をする鳥が欲しい、妹はチワワ犬が欲しい、話し合っ犬を買いに行くことになった。大体20万位で、ボーナスで買おうかとお店に行ったところ、3万だと言われた。その犬は5歳とのこと、抱っこしたらまあいいかなと買おうかなとなり、しっかり面倒を見るという条件で買った。

(2) 考察

抽出場面① 実習2【観技】

抽出場面①観技のfでは、線香といったそれまでの発表内容と違って、その時に皆から笑いが起きた。思いがけない内容にハッとして気づかされた場面ではないだろうか。講師(監督)は、全員の発表がなされた後のコメントで、20人いれば20通り、40人いれば40通りの見方がある、それぞれの見方があるということ、そして皆が自分の見方を発表したということが素晴らしいことに言及していた。一人の見方は、演者の一部分を見ているのであり、様々な見方があること、それは、幼児を理解する上で忘れてはならない多面的な見方である。また、肯定的にお互いを尊重し認め合える関係を培うことは、子どもにかかわる保育者の大切な役割でもある。

抽出場面② 実習3【エゴビルディング】

抽出場面②エゴビルディングでは、cやeの様に、肯定される側の子どもの気持ちが感じられたり、子どもと同じことをしてみることによって子どもの内面をあれこれと理解しようとしていたりしていた。C(ダブル)は、難しいかもしれないが、捉えたことを言語化して伝えることが、幼児を深く理解したり幼児を認めたりすることにつながる。

抽出場面③ 実習4【家族の心理劇】

抽出場面③ロールプレイでは発表内容を、どのグループにおいても皆が耳を傾けて聴いていた。各グループの発表は多様であり、自分の見方、考え方を広げ、家族関係(子どもの要求に家族がどのようにかわるか)や社会的関係(現在の社会状況における子どもの買いたいもの、買いに行ったお店での体験)などを通しての、子ども理解を深める機会となったのではないかと。子ども理解も様々な状況、役割、立場や見方から関係的に捉えることが必要であると考察された。

3) アンケート、質問紙からの分析、考察

(1) 質問紙の構成(心理劇(実技2, 3, 4)とその合間の解説を交えた講義)と回答者の属性

質問紙の項目は、本講座の主旨にそって、回答者にどのような体験、学びが育まれたのかについて、自己評価ができるような配慮がなされているために、事前の統計的検討はなされていない。また、回答者が21名と少数であるために、統計的処理について有効であるか議論があることをふまえて、行っているものである。

項目の構成は、以下の通りである。心理劇については、「他の人がふるまう様子を観たり、自分がふるまってみてどう感じましたか」と問い、「2. 楽しいと感じられた。」、「4. いろいろな観方やふるまい方があることに気付いた。」、「7. 実際に役割を取ってみてその立場や気持ちが実感できた。」、「12. 他の人の気持ちや行動を察したり理解することができた。」、「13. 自分の課題を見つけることができた。」、「16. 子ども理解の仕方、かわり方を体験できた。」等の全16項目を作成した。また、講義(各心理劇の後、その体験をふまえた解説を含む)については、「講師の説明を聞いてどう感じましたか」と問い、「1. 課題の意味が理解できた。」、「3. 新しい見方、考え方を知ることができた。」、「6. 学んだことが自分自身の問題解決に役に立つと感じた。」、「9. 子どもの理解の仕方、かわり方がわかった。」、「10. 子どもをとりまく環境や人間関係が重要だとわかった。」等の12項目を作成し、3つの活動(①(実習2)多面的な見方ー5つのかわりー、②(実習3)肯定的な見方ーエゴビルディングー、③(実習4)関係的な見方ー家族の役割ー)のそれぞれに4件法(4 とても当てはまる 3 かなり当てはまる 2 やや当てはまる 1 少し当てはまる)で回答を求めた。

また、子どもに関わる仕事に就いているか、そうでないかによって感じ方が異なると考え、本質問紙で「あなたの理解したい(と思う)子どもとの関係」として、自分の子どもや孫といった選択肢のほか、「勤務先(園・学校・施設)の子ども」の選択肢を作成し、複数回答可で回答を求めた。「勤務先(園・学校・施設)の子ども」に○をしたものは、専門職として、本講座を受講していると判断した。

(2) 結果と考察

i アンケート回答者数は23名中21名で回収率91.3%だった。

ii 回答者の属性

a. 性別

1. 女性16名(76.2%)、2. 男性5名(23.8%)

3. 未回答0名(0.0%)

b. 年代

1. 29歳以下1名(4.8%)、2. 30歳代0名(0.0%)、

3. 40歳代9名(42.9%)、4. 50歳代3名(14.3%)、

5. 60歳代3名(14.3%)、6. 70歳以上5名(23.8%)、
7. 未回答0名(0.0%)

c. 仕事

「あなたの理解したい(と思う)子どもとの関係」で「勤務先(園・学校・施設)の子ども」に○をしたものは9名だったが、この質問のどの項目にも○をしなかったもののなかで、自由記述欄に「保育者」または「教員」とあると記したものが3名おり、計12名(57.1%)を「専門職」とした。どの項目にも○をせず、自由記述欄にも記載のなかった2名(9.5%)は除き、7名を非専門職(33.3%)とした。

iii 本講座への満足度

表1の通り、本講座の満足度は大変高く、満足と回答したものが81.0%、やや満足と回答したものが9.5%だった。

iv 心理劇後の講義(心理劇の解説・講義)の効果についての検討

今回の講座では、各々の心理劇を行った後に、心理劇の体験を踏まえて、振り返りながら解説・講義を行った。心理劇による行為・情緒の体験を各テーマと関係づけて認識的に理解し、より学びを確かにすることができたのかを、検証する。心理劇とその後の講義の効果を検討するために、心理劇(実習2, 3, 4の3場面)の全得点の平均と講義の全得点の平均を算出した(表2)。心理劇の得点の平均は、3.55(4点満点)と高い得点だったが、講義はさらに高く、3.71点だった。講義では心理劇の体験もふまえたうえで「6. 学んだことが自分自身の問題解決に役に立つと感じた。」等の総括的な質問項目が多かったことが、得点の違いの原因だと思われる。このことから、心理劇を行った後に、その振り返りをしながら、テーマと関連して解説・講義することは、より理解を確かにする効果があると考えられた。

表1. 本講座の満足度

満足	17	(81.0%)
やや満足	2	(9.5%)
普通	0	(0.0%)
やや不満	0	(0.0%)
不満	0	(0.0%)
未回答	2	(9.5%)

表2. 心理劇と講義の効果の比較

N=20	心理劇	講義
平均 (SD)	3.55 (0.34)	3.71 (0.36)

v 3つの場面の比較

3つの場面による違いを検討するために、心理劇、講義ともそれぞれの質問項目ごとに、1要因の分散分析(被検者内計画)を行った(表3、表4参照)。その結果、心理劇では、「1 落ち着いていられた。」のみ、有意差があった($F(2,36)=3.87, p<.05$)。主効果の比較の結果、①>②、③>②となり、①観技(多面的な観方)や③家族の役割は、より落ち着いていられたと感じたようだった。①の心理劇の方法は、観客の役割を取り実習が行われることから、より落ち着いていられたのではないかと考えられる。②や③の、実際にふるまい体験する方法のウォーミングアップとして、最初に行われたのは適切だったのではないかと考えられた。それ以外の項目では有意差がなかった。また、講義ではどの項目でも有意差はなかった。

vi 専門職(保育者・教員等)と非専門職の講座の捉え方

心理劇の学びについての自己評価は全体として3.55でほとんどの人が高得点であったが、図1の様に専門職(保育者・教員等)と非専門職の講座の捉え方について、総じて非専門職の方が高く、「1. 落ち着いていられた。」、「6. 他の人がふるまいやすいように助けなくなった。」、「13. 自分の課題を見つけることができた。」、「15. 全体の状況が見えてきた。」、「16. 子ども理解の仕方、かわり方を体験できた。」が有意に高かった。非専門職の人にとっては自分の日常生活における子ども理解が進んだことが読み取れる。一方、専門職の得点が低かったのは、専門職として具体的な課題意識をもち講座に参加していることで、より認識的に自己をとらえたからではないかと考察される。また、「15. 全体の状況が見えてきた。」では、勤務先で子どもと接しているものは、常に全体の中で子どもを観ていることで、心理劇でも全体に目が行きやすく、その結果、まだ全体の状況が見えていないと感じたのではないだろうか。また、「16. 子ども理解の仕方、かわり方を体験できた。」については、課題、問題の解決に向けた心理劇ができればよかったのかもしれないと考察される。

講義についても全体として3.74と高得点で、図2の様に専門職も非専門職も総じて得点が高く、有意差のある項目はなかったが心理劇同様、非専門職のほうが専門職よりも若干得点が高い項目が多かった。しかし、「4. 学んだことを実践してみたいと感じた。」や「8. もっと学んでみたいと感じた。」は有意差はなかったものの、専門職に高い得点だった。つまり、専門職は、今回の講座で学んだことを実践に結びつけようと考えていること、今回の学びが不満だったのではなく、さらなる学びを欲しているのではないかと考察された。

表3. 3つの場面の心理劇の認識の違い

平均値 (SD)	①多面的な見方 5つのかわり	②肯定的な見方 エゴビルディング	③関係的な見方 家族の役割	F 値	検定結果
1. 落ち着いていられた。	3.53 (0.61)	3.16 (0.60)	3.37 (0.68)	3.87	*
2. 楽しいと感じられた。	3.83 (0.51)	3.72 (0.57)	3.89 (0.32)	1.43	
3. 自分の立場におきかえて考えることができた。	3.37 (0.68)	3.42 (0.61)	3.58 (0.61)	1.19	
4. いろいろな観方やふるまい方があることに気付いた。	3.63 (0.60)	3.63 (0.60)	3.63 (0.60)	0.00	
5. 新しく役割を取ってみることができた。	3.16 (0.90)	3.37 (0.60)	3.37 (0.60)	0.83	
6. 他の人がふるまいやすいように助けたくなった。	3.32 (0.89)	3.32 (0.58)	3.58 (0.51)	1.61	
7. 実際に役割を取ってみてその立場や気持ちを実感できた。	3.53 (0.77)	3.58 (0.61)	3.63 (0.60)	0.26	
8. 新しいかわり方を学んだ。	3.68 (0.58)	3.63 (0.50)	3.58 (0.51)	0.32	
9. これからは自分のふるまい方を変えてみようと思った。	3.68 (0.48)	3.63 (0.50)	3.63 (0.50)	0.19	
10. 役割(ふるまい方)や場面を実感することができた。	3.53 (0.61)	3.47 (0.61)	3.53 (0.61)	0.14	
11. みなとのつながりを感じた。	3.68 (0.58)	3.58 (0.61)	3.68 (0.67)	0.43	
12. 他の人の気持ちや行動を察したり理解することができた。	3.61 (0.61)	3.67 (0.49)	3.56 (0.51)	0.41	
13. 自分の課題を見つけることができた。	3.37 (0.68)	3.47 (0.51)	3.37 (0.60)	0.35	
14. 他の人との交流ができた。	3.79 (0.54)	3.79 (0.42)	3.79 (0.42)	0.00	
15. 全体の状況が見えてきた。	3.37 (0.60)	3.42 (0.61)	3.42 (0.51)	0.12	
16. 子ども理解の仕方、かわり方を体験できた。	3.58 (0.61)	3.63 (0.50)	3.63 (0.50)	0.16	

* p<.05

表4. 3つの場面の講義の認識の違い

	平均値 (SD)	①多面的な見方	②肯定的な見方	③関係的な見方	F 値	検定結果
		5つのかかわり	エゴビルディング	家族の役割		
1. 課題の意味が理解できた。		3.68 (0.58)	3.58 (0.61)	3.68 (0.58)	1.00	
2. 自分にも当てはまる課題だと感じた。		3.68 (0.58)	3.68 (0.48)	3.63 (0.60)	0.19	
3. 新しい見方、考え方を知ることができた。		3.83 (0.51)	3.83 (0.38)	3.83 (0.38)	0.00	
4. 学んだことを実践してみたいと感じた。		3.79 (0.54)	3.74 (0.45)	3.79 (0.42)	0.32	
5. 学んだことを周りに伝えたいと感じた。		3.63 (0.60)	3.58 (0.61)	3.58 (0.51)	0.16	
6. 学んだことが自分自身の問題解決に役に立つと感じた。		3.63 (0.76)	3.63 (0.68)	3.63 (0.60)	0.00	
7. 新しい課題を見つけることができた。		3.58 (0.77)	3.58 (0.69)	3.58 (0.61)	0.00	
8. もっと学んでみたいと感じた。		3.84 (0.37)	3.74 (0.45)	3.79 (0.42)	1.00	
9. 子どもの理解の仕方、かかわり方が変わった。		3.53 (0.61)	3.58 (0.61)	3.63 (0.50)	0.74	
10. 子どもをとりまく環境や人間関係が重要だとわかった。		3.79 (0.42)	3.79 (0.42)	3.89 (0.32)	1.36	
11. 子どもと共に成長することが重要だとわかった。		3.79 (0.54)	3.74 (0.45)	3.84 (0.37)	0.74	
12. 実際の生活や仕事で活かしていこうと思った。		3.84 (0.50)	3.84 (0.37)	3.84 (0.37)	0.00	

(3) 感想内容の質的分析・考察

①目的

本講座は、受講者は23名であった。表1の様に受講者の満足度はかなり高かったと思われる。ここでは、講座の進め方、内容との関係で受講者にどのような学びがなされたか、講座全体とともに本講座に用いた心理劇（ロールプレイ）という方法が、どのような影響、効果を与えたか、即ち、本講座の目的は「子ども理解の技を学ぶ」ことであり、講座の実施により、この目的が受講者にとって一定の

効果、学びの体験が成立したのではないかという仮説のもとに分析、考察する。

②方法と手続き

受講者の自由記述感想内容からM-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）の分析法を参考に、表1、図1を作成し、「子ども理解の方法（技）の学び」の構造と過程、効果を考察する。なお、感想は受講者が任意に記入する形式である。感想を記入した受講者は、21名中15名で71.4%であった。

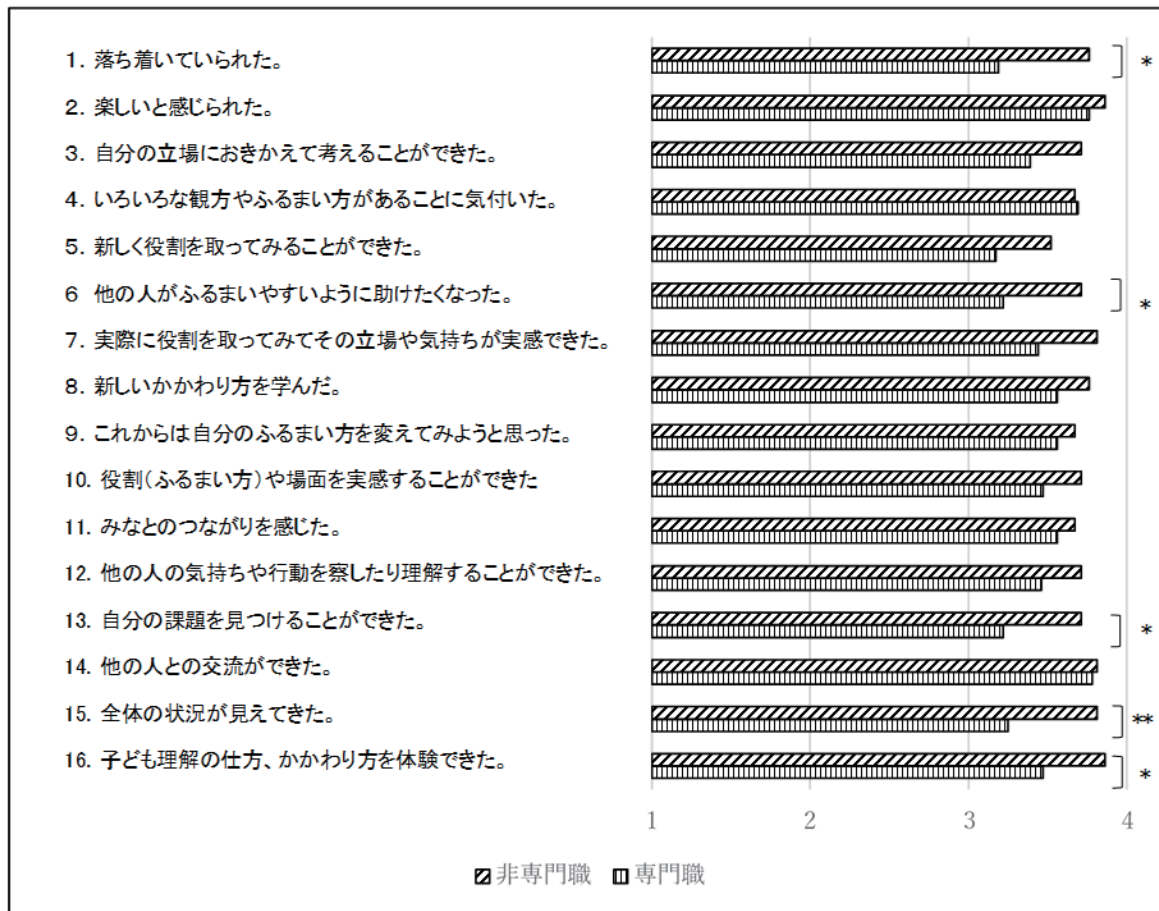


図1. 心理劇の認識の専門職と非専門職の得点比較

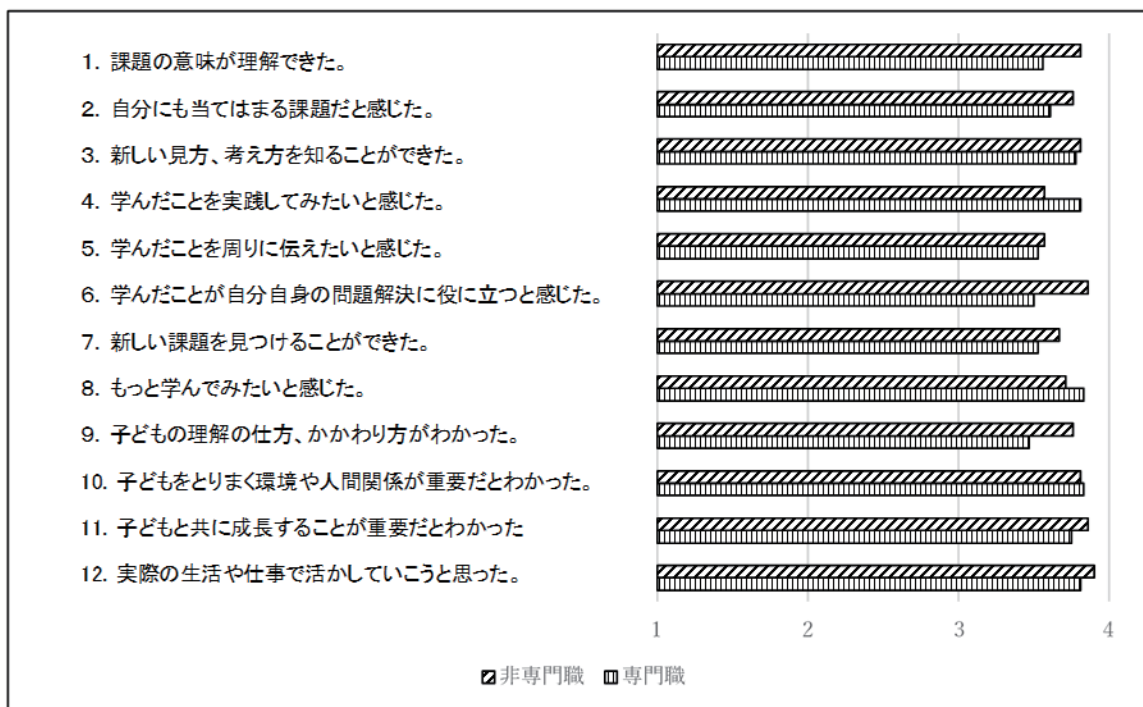


図2. 講義の認識の専門職と非専門職の得点比較

③結果と考察

感想の内容の意味を損なわないようにデータを作成し、
a.「子どもへの見方・かかわり方」b.「子どもの気持ちと自己肯定感」c.「子ども期の重要性」d.「人間関係・コミュニケーションの大切さ」e.「演じること・役割を取ることに意味」f.「情緒体験（楽しい、驚き、新鮮さ、ドキドキハラハラ、等）」g.「学びの体験と実践への展望」といった概念に整理されることが分かった。さらに、概念は、「子ども理解についての学び」「心理劇（ロールプレイ）を通しての学び」、「講座全体からの学び」にカテゴリー化できた。

また、講座全体は、i ウォーミングアップ（行為化への準備）、ii 観技（多様な見方、五つのかかわり方の理解）、iii 講義（ii についての解説）iv エゴビルディング（小グループによる、肯定的な見方、かかわり方）、v 講義（iv についての解説）、vi 家族の心理劇（iv のメンバーと同じ小グループ

による。子どものいるいろいろな家族。家族の関係状況における子どもの理解）、vii 講義（vi についての解説）というような経過で進んだ。

表5、図3に表された感想の内容の構造と経過、相互の関係から、「子ども理解の技を学ぶ」ためには、心理劇（ロールプレイ）により①現実の疑似的、縮図的場面のなかで実際に役割を取り演じてみることで、子どもや子どもに関わる人の立場が身をもって「分かる」という体験がなされること、②同じ目的で集まった集団の人間関係・コミュニケーションが促進されること、③心理劇を通して、他の人の演じる姿を観客として観る体験により様々な気づきや課題についての理解が進むこと、④台本の無い、即興的に今ここで新しく役割を取り、その体験を自分の体験として発表し、集団に受け入れる体験を通して、自発性、意欲が増すこと、⑤楽しい、驚き、新しさ、などの情緒的な体験、

表5. 講座「子ども理解の技を学ぶ」の受講による学びの内容と構造

目的 (仮設)		子ども理解の技を学ぶ						
経過		i ウォーミングアップ→ ii 観技→ iii 講義→ iv エゴビルディング→ v 講義→ vi 家族の心理劇→ vii 講義						
カテゴリー		子ども理解についての学び			心理劇(ロールプレイ)を通しての体験・学び		講座全体からの学び	
概念		a. 子どもへの見方、 かかわり方	b. 子どもの気持ちと 自己肯定感	c. 子ども期の重要性	d. 人間関係・コミュニ ケーションの大切さ	e. 演じること・役割を 取ることの意味	f. 情緒体験(楽しい、 驚き、新鮮さ、など)と 学びの実感	g. 学びの体験と実践 への展望
データ	心理劇を通して子どもへのかかわり方を楽しく学べた。	自己肯定感を育てることが大切だと思った。	自分が思っていた以上に子ども期が重要だと思った		演じる役割の人の気持ちになってみる体験ができた			
	違う立場に立つと、見方も変わり、深く考えるきっかけになった	演じることにより、子どもの気持ちを考えるきっかけになった	子ども理解に対する学びができた		子どもの気持ちになれた			
	内在的なかかわり方は少しはいいのだが、長続きはしないと理解できた				実際にアクションに移すことにより自分の中にたくさんのものが入ってきた	今日学んだことを実践していきたい		
	自己肯定感を育てることが大切だと思ったので、今後5つのかかわり方を意識しながら子どもと関わっていききたい					とても楽しく学べた。是非今後に活かしていきたい		
	保育園で働いていて気になる子どもへの対応で日々悩んでいる現状。子ども達にいかにか自己肯定感を積み重ねられるか考えながら接していきたい				心理劇の奥深さと適切なアドバイスはとても勉強になった			
	今後子どもと関わる仕事に就く予定なので、子どもとのかかわり方、心、行動が分かればと、今回参加した	ロールプレイやなりきり、家族の心理劇が楽しかった					大変勉強になった	
		今日はじめて逢った方々と親子だったり姉妹だったり楽しく過ごせた					心理学に興味があるので一生懸命聞かせてもらった	
		なかなか家庭に活かせるのは難しいですが手本にして家族で考えてみたいと思う						
		とても楽しくすごした時間だった。演じることがその人の気持ちになってみる、そんな経験は普段からしてみようと思ってもいなかった						
		実技ありということで少しドキドキしたが楽しく過ごすことができた						
はじめておあいした人々でも共にロールプレイする中で、親しくできたと思う。緊張していたが楽しい講義だった								
今回のことを思い出し幼稚園や自宅の子どもに接していこうと思う								
まだいろいろなことを知りたいし、今日学んだことを実践していきたいと思う								
共に学べたことがうれしい								
最初はハラハラしたが、実際に講義を受けて、とても分かりやすく楽しく学ぶことができた								
一方的な講義でなく参加型の講義でよかった								

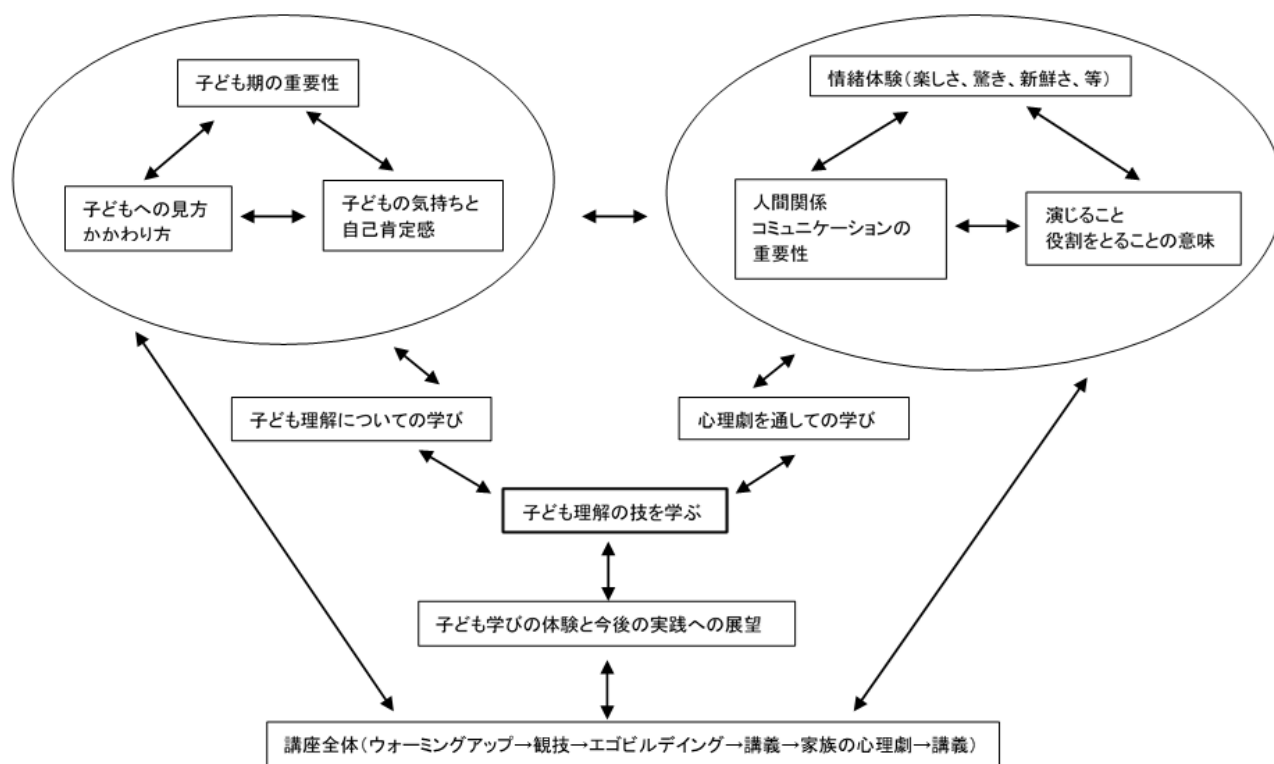


図3. 「子ども理解の方法(技)」の学びの過程と構造

また最初は緊張、ハラハラ、ドキドキしていたが、講座が進むにつれ、心理劇を体験、共有する中で、メンバー同士の相互関係、コミュニケーションが進み、笑いが度々起こるなど、親しさ、楽しさに変化する等、集団の一員としての共有体験や個々の癒しにもつながることがくみ取れた。そのことが、子ども理解での、理解する、されるの二者関係のなかだけではなく、集団の関係状況を共有し、共に学び、理解し合い、喜び合える関係をつくりだすことになっているのではないかと考察された。また、⑥心理劇の実施に加え、その後に、理解のために振り返り解説をする講義を入れたことにより、行為、認識、情緒が相互に関わり合って、より課題の学びに効果をもたらしたと考察された(図4)。

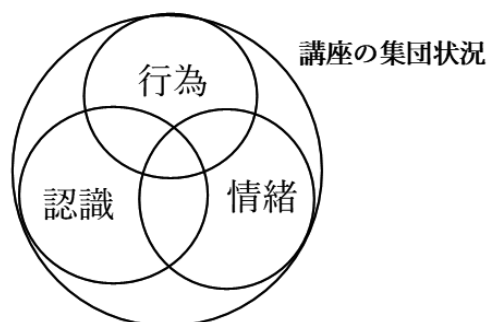


図4. 講座の学びの構造

4. 総括的考察

本研究の目的は、本大学講座において心理劇という手法がどのような効果があったかについて明らかにすることにある。研究方法として(1) 講座の内容からの場面抽出、(2) アンケート、質問紙の回答からの量的分析、(3) 質的分析を行い、次のようなことが明らかになった。さらに(1)(2)(3)をふまえ、(4) 今後の課題を述べる。

(1) 講座内容からの場面抽出では場面①観技の体験から、特に皆から笑いが起きた場面に着目した。演者のふるまいについての見方を発表している時に、一人の思いがけない内容が発表され、それを聞いた他のメンバー(受講者)は、ハッとて、違う見方に気づかされ、その驚きが笑いになり、それは全体で共有された場面であると考察できる。このように、他にも心理劇を実際に行ってみての、様々な情緒体験が成立していることが分かった。感想からの質的分析においても(表5、図3、図4)、他の場面でも笑いが起こった場面が度々あり、この時、楽しさ、面白さ、驚き(意外性)、新鮮さなどが強く感じられ、それが顔を見合わせながら笑いで表現されることにより、人間関係、コミュニケーションが発展し、学びの体験として確かになっていったのではないかとといったプロセスが明らかになった。また、そこで、肯定的にお互いを尊重し認め合える関係を

培うことは、子ども理解を進める保育者の大切な役割を認識、体験できたと考察された。

場面②エゴビルディングでは、肯定される側の子どもの気持ちを感じられたり、子どもと同じことをしてみることによって子どもの内面をあれこれと理解しようとするための心理劇であり、子どもの内面を察して表現するという補助自我の役割としての(ダブル)は、難しいかもしれないが、捉えたことを言語化して伝えることが、子どもを深く理解し、その存在を肯定的に認めることにつながる体験と学びであると考察された。

場面③家族の心理劇からは、各グループの発表は多様であり、自分の見方考え方を広げ、深める機会となったのではないかと考察された。特に、家族の関係状況の中で実際に親や子どもの役割をとってかわり合うことで、子どもへのかかわり方、子どもの気持ち(内面)の理解と自己肯定感、そして子ども期がとても重要である、といった認識的な学びがなされたことが分かった。これも心理劇(行為)を通して、様々な情緒体験(情緒)が他の受講者との共有体験につながり、上記の認識的な学び(認識)と、相互に関連して、先への実践への展望にもつながっていくことが分かった(図4)。

(2) アンケート、質問紙の回答からの量的分析からは、心理劇(行為・情緒)とその後の体験を踏まえた解説・講義(認識)の効果を検討したところ、心理劇の得点の平均は、3.55(4点満点)と高い得点だったが、講義はさらに高く、3.71点だった。このことから、心理劇を行った後に、その振り返りをしながら、テーマと関連して解説・講義することは、より理解を確実にする効果があると考えられた(表2)。

次に、上記の心理劇による3つの場面①、②、③の場面の違い、また、受講者のなかで、保育者や教師などの専門職と非専門職について、取り上げた。3つの場面の違いを短い場面のなかで認識することは難しかったようで心理劇では、「1. 落ち着いていられた。」のみ、有意差があり①観技や③家族の心理劇ではより落ち着いていられたと感じたようだった。

また、専門職(保育者・教員等)は、心理劇の学びについての自己評価が非専門職に比べて総じて低かったが、この結果は専門職として具体的な課題意識をもち講座に参加している人の方が、より認識的に自己をとらえたからではないかと考察された。講義については有意差のある項目はなかったが、専門職は今回の講座で学んだことを実践に結びつけようと考えていること、さらなる学びを欲しているのではないかと考察された(図1、図2)。地域公開講座は、「一般の方を対象に、文化教養の向上を図るため、本学の

研究成果を広く地域に還元する」目的で開催されるものであり、受講資格はなく、受講料も無料のため、だれでも気軽に参加できる。しかし、今回の講座の参加者をみると、回答のあった21名中、12名が専門職であり、地域で活躍している専門職が学ぶ場を求めていることが分かった。今回は、2時間の講座で、その中で心理劇と講義が織り交ぜてあり、子ども理解の方法について、心理劇を活用して、誰もが体験として学びが成立するように、ねらい、構成がなされている。専門職にとって、基本的な段階は達成されたが、次の、職場等における具体的な自己の課題と結びつけるところまで進まなかったと感じたものもいたかもしれない。講座を実施するにあたって、学習効果をさらに高めるためには、個人情報保護の点を踏まえつつも、あらかじめ、受講者の状況やニーズが把握できるとよいのかもしれない。

(3) アンケート、質問紙の回答からの質的分析では、表5、図3に表された感想の内容の構造と経過、相互の関係から、「子ども理解の技を学ぶ」ためには、心理劇(ロールプレイ)により①現実の疑似的、縮図の場面の中で実際に役割を取り演じてみることを通して、子どもや子どもに関わる人の立場が身をもって「分かる」という体験がなされること、②同じ目的で集まった集団の人間関係・コミュニケーションが促進されること、③心理劇を通して、他の人の演じる姿を観客として観る体験により様々な気づきや課題についての理解が進むこと、④台本の無い、即興的に今ここで新しく役割を取り、その体験を自分の体験として発表し、集団に受け入れる体験を通して、自発性、意欲が増すこと、⑤楽しい、驚き、新しさ、等の情緒的な体験、また最初は緊張、ハラハラ、ドキドキしていたが、講座が進むにつれ、心理劇を体験、共有するなかで、メンバー同士の相互関係、コミュニケーションが進み、笑いが度々起こり、親しさ、楽しさに変化する等、集団の一員としての共有体験や個々の癒しにもつながることが分かった。そのことが、子ども理解での、理解する、されるの二者関係のなかだけではなく、集団の関係状況を共有し、共に学び、理解し合い、喜び合える関係をつくり出すことになっているのではないかと考察された。⑥アンケートのデータ分析でも述べられたように心理劇の実施に加え、その後に、理解のために振り返り解説をする講義を入れたことにより、行為、認識、情緒が相互に関わりあって、より課題の学びに効果をもたらしたと考察された(図4)。

(4) 今後の課題

今回の公開講座の参加者は、定員40名で、実際の応募者はすぐに定員を超え、多数であり、希望者にお断りもしたということであった。しかし、実際の参加者は21名であったことから、これは講座開催の際の課題であると考えられ

る。受講者はみな大変学びへの意欲が高く有意義な講座の実施ができたとはいえ、対象者の人数が少なくなった。したがって、仮説を実証するための量的データとしては少ないため、今後、さらに質問紙の内容を吟味し、他の機会においても、継続的に実施し、確かなものにしていく必要がある。また、心理劇による方法が効果的であるとするさらなるエビデンスを得るには、心理劇を入れない講義による方法(コントロール群)との比較が必要である。本研究においては、質的分析も同時に行い、実証性を高めようとしたが、これもさらなる検証を行なっていく必要があり、今後の課題としたい。

謝辞

今回の研究にあたり、公開講座に参加・協力いただいた受講者の皆様、及び本学公開講座担当の教員、事務の先生方に深く感謝申し上げます。

文献(参考引用文献)

- ロイツ, G.A.・野村訓子(訳)(1989): 人生を舞台にーモレノの継承と発展 心理劇. 関係学研究所, 16-49.
- 針塚 進(2003): ロールプレイングと心理劇. 心理劇 **8**(1), 1-2.
- 針塚 進・岡嶋一郎(1997): 心理劇の場面構造と演者・観客の意識的体験ー心理劇の体験的現実性の視点からー. 心理劇 **2**(1), 49-59.
- モレノ, J.L.・増野 肇(監訳)(2006): サイコドラマ. 白揚社.
- 川端政道(2002): ロール・プレイングの解釈技法としての役割分析の可能性. 心理劇 **7**(1), 23-38.
- 木下康仁(2003): グラウンデット・セオリー・アプローチの実践ー質的研究への誘い. 弘文堂.
- 木下康仁(2007): 修正版グラウンデット・セオリー・アプローチ(MT-GAT)の分析方法. 富山大学看護学会誌 **6**(2), 1-10.
- 松村康平(1961): 心理劇ー対人関係の変革. 誠信書房.
- 松村康平(1967): 臨床心理学の方法. In: 臨床心理学. 朝倉書店, pp240-255.
- 松村康平・斎藤 緑(1991): 人間関係学. 関係学研究所.
- 卯木佑佳・島谷まき子(2005): 心理劇的ロールプレイングにおける役割体験の意味. 心理劇 **10**(1), 63-70.
- 吉川晴美(2004): 関係性の育成と発展のトレーニング: 現代のエスプリ 人間関係の回復と創造. 至文堂, pp86-96.
- 吉川晴美(2017): 心理劇(行為法)を通して. In: 吉川晴美・松井知子(編), 人間関係の理解と心理臨床 家庭・園・学校・施設・職場の問題解決のために. 慶応義塾大学出版会, pp.200-205.

Approach to “Understanding Child’s Mental and Behavior” – Benefits of Psychodrama Peerformed in Public Lecture –

Yoshiko SUZUKI^{*1}, Yu MIZUHO^{*2} and Harumi YOSHIKAWA^{*3}

^{*1} Junior College, Tokyo University of Social Welfare (Isezaki Campus),
2020-1 San’o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

^{*2} School of Child Care and Early Childhood Education,
Tokyo University of Social Welfare (Isezaki Campus),
2020-1 San’o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

^{*3} Graduate School, Tokyo University of Social Welfare (Ikebukuro Campus),
2-47-8 Minami-ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 171-0022, Japan

Abstract : This research focuses on how playing a role in a psychodrama help understand mental and behavior of self or others, particularly, of a child. Psychodrama is often employed to build up human interaction skills in many types of workshop. Based on the hypothesis that a psychodrama also enhances participants’ understanding of mental of self or other participants, we asked some attendees of the open public lecture called “Techniques for Understanding Child’s Mental and Behavior” to play a child’s role and others to play an adult’s role in a psychodrama. After going through feedbacks from participants and observing the ways participants react while playing, we concluded that playing a child’s part in a psychodrama or observing someone playing in the drama, often filled with laughter or surprise, helped them understand child’s mental and behavior while building up relationships with other participants.

(Reprint request should be sent to Yoshiko Suzuki)

Key words : Understanding child’s mental and behavior, Benefits of psychodrama,
Open minded, considerate, and positive approach, Role playing

